

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25540155

研究課題名(和文)近代日本における流言効果のメディア史的研究

研究課題名(英文)Media Historical Study of Rumor Effect in Modern Japan

研究代表者

佐藤 卓己(SATO, Takumi)

京都大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：80211944

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文): 流言蜚語がメディアを通じて世論形成に与えた影響に関する日本現代史を体系的に考察した。その成果が『考える人』に連載した「メディア流言の時代」全8回である。補論を加えて2017年に単行本化する予定である。

また、メディア流言史の視点から2014年の「朝日新聞誤報問題」についても、論点整理を行った。「誤報事件の古層」(『図書』2014年12月号・岩波書店)や「誤報のパラダイム転換」(『Journalism』2015年3月号・朝日新聞社)である。理論的な総括は、「デジタル社会における「歴史」の効用」『岩波講座 現代1 現代の現代性』(岩波書店・2015年)で行った。

研究成果の概要(英文): From a viewpoint of the influence by which rumor gave it to opinion formation through media, I considered the Japanese contemporary media history systematically. This research subject is the serial monograph, "The Time of the Media rumor" in "the Kangaeruhito". The full version of this monograph shall be published in book form.

To examine this issue of the media rumor actually, I attempted to sort out the future points for discussion about "the False Report problems of Asahi Shimbun in 2014" with the 2 articles, "Older layer of the false report" ("Tosho") and "Paradigm conversion of false report" ("Journalism"). To consider those problems more theoretically, "the use of the history in digital society" was contributed in "Iwanami lecture: The Present Times 1".

研究分野：メディア史

キーワード：流言 デマ 誤報 あいまい情報 メディア史 うわさ 陰謀論 情報統制

## 1. 研究開始当初の背景

応募者はメディア史、広報学の領域でプロパガンダや世論調査に関する歴史研究を蓄積してきた。流言蜚語やスキャンダル報道に関しても、佐藤卓己「キャスル事件をめぐる〈怪情報〉ネットワーク」(猪木武徳編『戦間期日本の社会集団とネットワーク』NTT出版・2008年)や『天下無敵のメディア人間 喧嘩ジャーナリスト・野依秀市』(佐藤卓己、新潮社・2012年)などを上梓している。だが、そうした個別研究の中で、流言蜚語やデマなど「あいまい情報」を分析する体系的な枠組をもったメディア史の必要性を感じてきた。

特に本研究の直接的契機は、2011年東日本大震災における情報混乱に接した個人的体験であり、それに対応するメディア研究者としての社会的責任である。たとえば、佐藤卓己「震災とソーシャルメディア」(『日本経済新聞』2011年5月8日)や佐藤卓己「“想定外”の風土」(『信濃毎日新聞』2011年5月16日朝刊)、佐藤卓己「危機予言とメディア・リテラシー」(『化学』化学同人・2011年10月号)など新聞・雑誌でも発信を続けてきた。そうした論説は『災後のメディア空間 論壇と時評』(佐藤卓己、中央公論新社、2014年)にまとめている。

こうした問題意識は、2012年8月に内閣官房「国民的議論に関する検証会合」委員として参加した経験、さらにサントリー文化財団「震災後の日本に関する研究会」国民感情部会(猪木武徳座長)で災害報道に関する研究に着手することで強まった。

## 2. 研究の目的

本研究「近代日本における流言効果のメディア史的研究」は、デマ、うわさ、陰謀論など流言蜚語がメディアと世論形成に与えた影響に関する歴史研究の方法論の確立と研究基盤の形成を目的としている。流言蜚語に関する歴史学的な先行研究としては、関東大震災の災害情報論や太平洋戦争期の流言統制について個別研究は存在するし、社会心理学者の事例研究も参考にすることができるが、怪文書や陰謀論まで含めた近代日本の流言現象全体を扱ったメディア史研究は国内外において存在しない。

本研究では、特に「情報化」の社会変動、ニュー・メディアの編成に焦点を当て、「あいまい情報」の効果に関する歴史のアプローチの確立をめざす。それは新しい歴史学である「メディア史」(『ヒューマニティ 歴史学』(佐藤卓己、岩波書店・2009年)の有効性を示す作業であるとともに、3・11震災後のメディア環境と情報リテラシー教育について有効な政策提言にもなるはずである。つまり、「流言に強い日本社会」を展望するメディア研究としたい。

3・11東日本大震災につづく福島第一原発の放射能流出事件では、さまざまな流言やデマ情報がインターネット上に出回り注目を

浴びた。近年の情報流通量の爆発的増大とソーシャルメディアの普及、さらにマス・メディアの信用低下によって、こうした流言が世論形成に及ぼす影響は無視できないものとなっている。しかし、史料批判を前提とする歴史研究では、こうした「あいまい情報」はこれまで周辺化され、体系的な研究は存在しない。本研究はメディア流言現象の既存研究を整理した上で、明治期以来の流言史料を再検討し、新しいメディア史研究の可能性を示したい。特に、以下4点の成果が期待できる。

- (1) 今日インターネット上で確認できる「情報劣化」、「下流世論」の現象を長期的な歴史的視点で再検討することで、現代の課題と対策を論じる上で不可欠な先行事例を見出すことが可能になる。
- (2) 文書館の官公庁資料を中心に研究が進められてきた歴史学研究に対して、流言やデマ、怪文書などを分析の対象とする近代日本コミュニケーション史の統合的な視座を提供する。
- (3) 理性的なジャーナリズムの理想と、感情的なマス・コミュニケーションの実態を複眼的に考察することで、新たなメディア史像を提示できる。
- (4) 情報洪水の中で教育現場での情報リテラシー教育が求められているが、流言・デマ・怪情報のメディア史は「歴史学の史料批判」と「情報学のリテラシー」を接続する実践的歴史学を確立する第一歩となる。

それゆえ、歴史学のみならず、メディア論や大衆文化研究においても新しい地平を切り開くものとなる。

## 3. 研究の方法

申請者はメディア史研究者として、特に世論(popular sentiments)に同時代のニュー・メディアが果たした関係をこれまで歴史的に解明してきた。前記「研究開始当初の背景」で挙げた著作以外では、『「キング」の時代 国民大衆雑誌の公共性』(佐藤卓己、岩波書店・2002年・第24回日本出版学会賞/第25回サントリー学芸賞)や『言論統制 情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』(佐藤卓己、中央公論新社・2004年・第34回吉田茂賞)あるいは戦前の怪文書と右翼言論について分析した佐藤卓己「日本主義ジャーナリズムの曳光弾 『新聞と社会』の軌跡」(竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代』柏書房・2006年)もある。こうしたメディア研究と世論研究の蓄積の上に、(1)これまで歴史資料としてまともに評価されてこなかった流言・デマ・怪情報を現代日本史の資料として位置付け、(2)不正確な情報が世論や政策の形成に与えた影響を批判的に検討し、(3)

正確な情報と理性的な討議を前提とする規範的な公共性論に対して公共性の歴史的現実を分析の俎上に載せてゆく。

メディア流言を対象とする本研究では、メディア史研究と公共性研究を二本柱として、社会心理学や政治学など学際的な研究成果を参照しつつ展開する。すなわち、規範的な公共性研究と実証的な歴史研究の狭間で埋もれた流言コミュニケーションとそのメディア報道の影響を分析する方法を確立することが目的であり、それは日本の公共性研究に新しい視座を提供することにもなる。加速化する情報社会で健全な輿論（public opinion）を形成する上で必要な課題を、メディア史のアプローチはバックミラー効果として明らかにすることになる。

なお、研究協力者や大学院生の協力も得ながら遂行してゆく。平成 25 年度は流言・デマ・怪情報の学術研究文献のデータベースを構築するとともに、新聞や一般雑誌など網羅的な資料の収集・整理につとめる。そのため、京都大学大学院教育学研究科メディア文化論研究室所属の大学院生、同出身の若手研究者を研究協力者として「流言メディア史研究会」を組織し、定期的に理論研究の報告会を開催する。平成 26 年度以降は上記データベースを完成させ、本格的に執筆を開始し、その成果を公表してゆく。

#### 4. 研究成果

デマ、うわさ、陰謀論など流言蜚語がメディアを通じて世論形成に与えた影響に関する歴史研究を体系的に収集した上で、「メディア流言」史として再編した成果は、季刊『考える人』（新潮社）の 2014 年冬号から 8 回にわたり「メディア流言の時代」として連載された。

特に、第 1 回「火星人来襲 から始まった？」では 1938 年のアメリカにおけるラジオ・パニックを扱ったキャントリルの古典的な調査報告書の妥当性をアメリカにおける最新のメディア史研究から再考した。また、連載第 2 回以降では関東大震災の流言蜚語から「戦後 70 年」報道まで「メディア流言」をキーワードとして現代日本史を読み解いた。この連載はさらに以下の誤報研究などを併せて加筆した上で、『メディア流言の時代』（佐藤卓己、新潮選書）として刊行の予定である。

こうして得られた知見を社会に還元するため、新聞時評や雑誌論評などでも、成果の一部を積極的に公開している。例えば、2014 年 2 月に発覚した「アンネの日記関連本破損事件」報道に関するメディアに対するコメントでも、「あいまい情報」への正しい向き合い方について具体的に提言した（2014 年 3 月 3 日付『信濃毎日新聞』「見守り」と「見張り」の両義性）および同 3 月 23 日付『産経新聞』「画一的なアンネ本破損報道」。

また、2014 年夏に発生した「朝日新聞誤報

問題」についても、メディア流言史の視点から論点を整理する論考を発表した。「誤報事件の古層」（『図書』2014 年 12 月号・岩波書店）および「誤報 のパラダイム転換ができれば新聞全体の信頼性は間違いなく回復する」（『Journalism』2015 年 3 月号・朝日新聞社）である。

こうした成果を理論的にまとめた論文が、大澤真幸・杉田敦・中島秀人・諸富徹とともに編集した『岩波講座 現代 1 現代の現代性』（岩波書店・2015 年）の論文「デジタル社会における「歴史」の効用」である。現在のメディア研究において最重要な課題が、短期的・直接的な効果ではなく、文化再生産を可能にする持続的・遅延的效果を解明することを示した上で、以下の文章で結んでいる。

「遅延報酬を意識するメディア史とは、教育のメディア史 であり 未来へのメディア史 と呼ぶことも可能だろう。そもそも遅延報酬的な営み、つまり教育が期待できない場所には未来もないからである。」

なお、この立場から『岩波講座 現代 5 歴史のゆらぎと再編』（岩波書店・2015 年）を編集し、「総説 「戦後 70 年」 に歴史の再編を見すえつつ」を執筆した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

佐藤 卓己、世論調査の「よろん」とは？ 世論観測から輿論 2.0 へ、放送メディア研究（NHK 放送文化研究所）査読無、13 号、2016、pp. 26 - 40 .

佐藤 卓己、「平和報道」の心情倫理と責任倫理 国際紛争に向き合う「9 月ジャーナリズム」を、新聞研究（新聞協会）査読無、774 号、2016、pp. 38 - 41 .

佐藤 卓己、「八月ジャーナリズム」の終焉 「戦後七〇年報道」始末、新潮 45、査読無、2015 年 11 月号、2015、pp. 70 - 79 .

佐藤 卓己、メディア流言の時代 第 8 回 ヒトラー神話の戦後 70 年、考える人（新潮社）査読無、No. 54、2015、pp. 216 - 223 .

佐藤 卓己、メディア流言の時代 第 7 回 「原子マグロ」の風評被害、考える人（新潮社）査読無、No. 53、2015、pp. 188 - 195 .

SATO Takumi、Consumption of Nazi Culture Images in Postwar Japan、京都メディア史研究年報、査読無、創刊号、2015、pp. 301 - 320 .

佐藤 卓己、メディア流言の時代 第6回  
焼け跡ジャーナリズムの「真相」、考える  
人(新潮社) 査読無、No. 52、2015、pp.  
138 - 145 .

佐藤 卓己、「誤報」のパラダイム転換が  
できれば新聞全体の信頼性は間違いなく  
回復する、Journalism(朝日新聞社) 査  
読無、2015年3月号、2015、pp. 171 - 177.

佐藤 卓己、メディア流言の時代 第5回  
造言飛語とデマ大戦、考える人(新潮社)  
査読無、No. 51、2014、pp. 162 - 169 .

佐藤 卓己、誤報事件の古層、図書(岩波  
書店) 査読無、2014年12月号、2014、  
pp. 16 - 23 .

佐藤 卓己、メディア流言の時代 第4回  
2・26事件の『流言蜚語』と太古秘史のデ  
モクラシー、考える人(新潮社) 査読無、  
No. 50、2014、pp. 168 - 175 .

佐藤 卓己、「戦争」イメージの貧困を乗  
り越えて いま求められる平和教育とは、  
月刊民放(日本民間放送連盟) 査読無、  
2014年8月号、2014、pp. 9 - 13 .

佐藤 卓己、「敵対=対話」を可能にする  
メディア 平和を問いつける闘技ジャー  
ナリズムへ、MOKU、査読無、No. 269、  
2014、pp. 85 - 87 .

佐藤 卓己、メディア流言の時代 第3回  
キャッスル事件の呪縛、考える人(新潮  
社) 査読無、No. 49、2014、pp. 132 -  
139 .

佐藤 卓己、メディア流言の時代 第2回  
関東大震災と災害デモクラシー、考える  
人(新潮社) 査読無、No. 48、2014、pp.  
108 - 115 .

佐藤 卓己、メディア流言の時代 第1回  
「火星人来襲」から始まった?、考える  
人(新潮社) 査読無、No. 47、2013、pp.  
100 - 108 .

#### [図書](計7件)

水野由多加・妹尾俊之・伊吹勇亮編、有  
斐閣、広告コミュニケーション研究ハン  
ドブック(佐藤 卓己「第13章 メディア  
社会の宣伝・広告・広報」) 2015、pp. 247  
- 263 .

佐藤 卓己 他、岩波書店、岩波講座 現代  
5 歴史のゆらぎと再編(佐藤 卓己「総  
説 “戦後70年” に歴史の再編を見すえ  
つつ」) 2015、292 (pp. 1 - 13).

佐藤 卓己 他、岩波書店、岩波講座 現代  
1 現代の現代性(佐藤 卓己「デジタル  
社会における“歴史”の効用」) 2015、  
384 (pp. 105 - 120).

川島真・孫安石・貴志俊彦編、勉誠出版、  
増補改訂 戦争・ラジオ・記憶(佐藤 卓  
己「第1章:ジオ文明とファシスト的公共  
性」) 2015、pp. 2 - 25 .

佐藤 卓己 他、中央公論社、ヒトラーの  
呪縛 日本ナチカル研究序説 上(佐藤  
卓己「序章:日本人にとって「ナチカル」  
とは何か?」、佐藤 卓己「第2章:驚は  
舞い降り、ヒトラーは甦る」) 2015、433  
(pp. 5 - 56、97 - 172).

佐藤 卓己 他、中央公論社、ヒトラーの  
呪縛 日本ナチカル研究序説 下(佐藤  
卓己「あとがき」、佐藤 卓己「文庫版あ  
とがき」) 2015、419 (pp. 315 - 318、319  
- 330).

御厨貴・飯尾潤責任編集、阪急コミュニ  
ケーションズ、「災後」の文明(佐藤 卓  
己「災後メディア文明論と「輿論2.0」」)  
2014、pp. 206 - 239 .

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

佐藤 卓己 (SATO, Takumi)  
京都大学・教育学研究科・教授  
研究者番号: 80211944